

# 日本ラテンアメリカ学会 会 報

№. 4 3

1992年11月25日

## 第43号 目 次

1. LASAへのジョイント・メンバーシップ大筋合意
2. 次期定期大会のテーマ募集
3. 理事会報告
4. 会員活動報告
5. 書 評
6. 学術・文化情報
7. 近着会員業績
8. 事務局から

1994年以降 LASAの学生会員費と同額

なお1998年度以降については、LASAの一般会費の趨勢を見て改めて決定する予定である。この制度は日本のラテンアメリカ研究者との交流を深めたいというLASA側の熱意と好意を反映したものであり、会員の多数がこの機会にLASAに参加し、その大会等を通して南北アメリカ大陸の研究者たちと直接の研究交流を深めることが望まれる。なお会費の徴収等の事務は日本ラテンアメリカ学会事務局がまとめておこなうことになっており、正式のLASA入会申込用紙等の配布はできるだけ早い機会に開始される予定である。

(恒川)

## 1. LASAへのジョイント・メンバーシップ大筋合意

昨年来LASA(米国ラテンアメリカ学会)との間で交渉を進めていたLASA-JALASジョイント・メンバーシップについて、ほぼ合意が成立した。これは日本ラテンアメリカ学会(JALAS)会員がLASAに参加する場合、割引会費を適用するというもので、具体的には以下の通りである。

教授または類似の職責にある会員

1993年度	30ドル
1994年度	50ドル
1995年度	52ドル
1996年度	54ドル
1997年度	56ドル

助教授・専任講師等

1993年度	25ドル
1994年度	40ドル
1995年度	42ドル
1996年度	44ドル
1997年度	46ドル

大学院生・退職者等

1993年度	20ドル
--------	------

## 2. 次期定期大会のテーマ募集

第14回次期定期大会は、会報42号で既報のように1993年6月12、13(土、日)の両日、上智大学(東京・四谷)を会場に開催されるが、11月7日開かれた理事会によって選出された大会準備委員会(委員長アンドラーデ理事・上智大学)では、大会の統一テーマ、シンポジウム、各研究発表パネル(分科会)の内容について、広く会員のアイディアをつっている。

これは大会を、会員ひとりひとりの参加度がより高いものとするため、とくに東日本、中部、西日本で定期的で開催されている研究会での発表をベースにシンポジウムやパネルの提案、あるいは会員数名が集まって企画されたパネルなどの提案を歓迎している。もちろん従来どおり会員ひとりひとりによる研究成果の発表も大歓迎である。

提案や発表を希望される方は、〒102 東京

都千代田区紀尾井町7-1 上智大学イペロ  
アメリカ研究所 G, アンドラーデまで、手紙  
ないしはFAX(3238-3229)にて連絡を望ん  
でいる。締め切りは12月末日。(堀坂)

### 3. 理事会報告

○第58回理事会 1992年11月7日(土)

場 所：上智大学

出席者：山田、アンドラーデ、大貫、石井、

恒川、堀坂、高橋、三田(書記)、

(委任状：中川(和)、加茂)

- 1) 第14回定期大会について。
  - ・大会準備委員の選出：アンドラーデ(委員長)、石井、加茂、堀坂、三田各理事
  - ・開催日及び場所：1993年6月12-13日、上智大学
  - ・大会プログラム策定方法を検討した。  
(記事2「次期定期大会のテーマ募集」を参照)
- 2) 検討中であった西日本研究部会運営委員を加藤隆浩会員(関西外国語大学)に委嘱することになった。
- 3) 国際交流について。
  - ・米ラテンアメリカ学会(LASA)の本学会会員に対する会費割引制度について承認した。
  - ・LASAの依頼によりTask Force on Latin America-U.S.-Japan Relationsのメンバー(92-93年度)に本学会よりアンドラーデ理事(首席)、恒川理事、細野昭雄会員、幡谷則子会員を選出した。
  - ・理事長より93年11月開催のSociedade Brasileira de Estudos sobre Japão e Pacíficoの国際大会に対するブラジルUNICAMPからの後援依頼の報告があり承認した。(6「学術・文化情報」を参照)
- 4) 会則等検討委員会の運営委員を小泉潤二会員に委嘱することになった。
- 5) 会報第43号の発行について報告があった。
- 6) 年報第13号の投稿について報告があった。
- 7) 新入会員4名が承認された。(8「事務局から」を参照)

### 4. 会員活動情報

○LASA(米国ラテンアメリカ学会)

第17回大会開催される

LASAの第17回大会が去る9月24日から27日にかけて、ロサンゼルスで開催された。400にのぼるパネルやワークショップが組織され、参加者も推定で延べ2000人をこえる盛会であった。当学会からは山田理事長ほか4人の理事と1人の運営委員が参加した。

日本・中南米関係に関するパネルは、26日に経済関係と政治・社会関係が1つずつ組織され、カルフォルニア大学サンディエゴ校米墨研究所のガブリエル・セッケリー上級研究員が前者の、LASAの対日本交流委員会議長バーバラ・スターリング教授(ウィスコンシン大)が後者の司会をつとめた。経済関係のパネルでは恒川会員がNAFTAの日本・中南米関係への影響について報告した。また政治・社会関係のパネルでは、アンドラーデ会員がフジモリ政権に対する日本の外交政策について、堀坂会員が日本へのブラジル日系人の出稼ぎ問題について、それぞれ発表した。会場は空席がないほどの盛況で、報告後の質疑応答も活発であった。

なお25日朝には、LASAの対日交流委員会メンバーと日本ラテンアメリカ学会メンバーの懇談会が開かれ、今後の両学会の学术交流の方向について意見の交換がなされた。その結果、①交流を恒常化するためにLASAの対日交流委員会を拡大して、日本ラテンアメリカ学会代表を加えた委員会を作ること、②この委員会への日本側代表としてはアンドラーデ理事、恒川理事、細野前理事長、幡谷運営委員の4人をあてること、③ラテンアメリカまたは米国に在住し、日本・ラテンアメリカ関係に関心をもつ研究者の住所リストを作成し、積極的に交流を呼びかけること、④LASAニューズレターに交流委員会の活動報告を載せたり、学会誌(Latin American Research Review)に日本・ラテンアメリカ関係についての書評論文を寄稿する方向で努力すること、⑤1994年春に予定されているLASAの次期大会(アトランタ市)で、日本

・ラテンアメリカ・米国関係について、実務家を交えたパネルを組織することについて合意に達した。(恒川)

○第2回国際マヤ研究者会議に参加して  
新大陸の住民にとって悲劇の幕開けとなった1492年からちょうど500年経ったことし、8月24日から29日まで、メキシコのユカタン州メリダ市において、メキシコ国立自治大学付属マヤ研究センターの主催による『第2回国際マヤ研究者会議』(Segundo Congreso Internacional de Mayistas)が開かれた。150人余の報告者によって、考古学、民族学、エスノヒストリー、言語学など様々な角度からマヤ文明の諸相が検討されたが、本稿では、初めて主催者側の一員として参加した筆者の個人的感想を中心に、この学会、ひいてはわれわれマヤ研究者の抱える問題点の一部を述べることにしたい。

前回会議の時点で、すでにマヤ研究の内向化が危惧されていたが(落合一泰当学会会員の報告『会報』32号、1989年12月10日号、4ページ参照のこと)、今回は各報告者のテーマの特殊化、細分化がなお一層進み、メソアメリカのなかのマヤ文明という広い視野を持つ報告は皆無に等しかった。そればかりか、マヤ領域を構成する3地域間はおろか、同一地域内における諸研究の間の対話、総合化すらもむつかしい状況になってきていることがはっきりしてきた。

この傾向は、現在のメキシコにおけるマヤ研究の動向を反映しているとも言え、その解決は容易ではない。しかし、例えば本学会に全体テーマを設定して積極的に研究視野を広げさせ、また記念講演にもそれに沿った研究者を招く努力はすべきであろう。

その意味において、今回記念講演者として出席した落合会員が、西欧文化がいかに自分たちのイメージに沿ってマヤ先住民文化のイメージを創出し利用してきたかを具体的に説明されたことは、マヤ研究を外側から評価す

るものとして、また従来この学会に欠如していた視点を提供するものとして重要であったし、参加者の間に相当なインパクトを持って受け入れられていたことも記しておきたい。

さて、もう1つ筆者の関心をひいたのは、会議の開会、閉会式の際に、先住民の青年が政府高官の演説をマヤ語に訳すために駆り出され、それに対しほとんどの参加者が無邪気な拍手を送っていた光景である。ここには、今なお政治の演出の道具としてしか扱われていない先住民文化と、それを暗黙のうちに是認している研究者たちの意識が見てとれるのであり、これに対する無言の抵抗、抗議が、今回の会議への先住民側の不参加となって現われた様な気がする。われわれ非西欧文化圏の研究者は、先住民とどの様な関わり方をすべきなのか、この深刻かつ根源的な問いをあらためて今回考えさせられた。

最後に、今回筆者は日本ラテン・アメリカ学会会員名簿をもとに、日本のマヤ研究者に本学会の案内状を送らせていただいた。その結果、2人のオブザーバーと3人の発表者があり、日本人研究者も国際的研究サークルのなかで少しずつ地歩を固めつつあるという強い印象を、参加者に与えることが出来た様に思う。

いつも考えるのだが、日本に居て日本語でいくらよい論文を発表しても、国際的な反響を得ることは極めてむつかしい。海外の研究者と切磋琢磨し合い、協力し合って研究を進めてゆくことを、もっとわれわれは積極的に実行すべきではないだろうか。国際学会は、日本に居て思う程遠い存在でも、また少数の選ばれた人々のためだけのものでも決してない。自分の研究の発展向上を目指す全ての人々に開かれた、知的サロンなのである。その意味で、マヤ研究者会議を大いに利用していただきたいし、また筆者もこちら側にあって出来るだけの事はさせていただくつもりである。なお次回は、1995年開催の予定である。

(メキシコにて 大越)

5. 書評 笈川博一『コロンブスは何を「発見」したか』  
講談社現代新書、1992年、222ページ。

評者：神崎牧子（東京大学大学院）

コロンブスの新大陸「発見」から500年の今年、さまざまな企画・出版が相次いでいる。本書もそうした“92年もの”の一冊である。

コロンブスに事寄せての動きは、すでに百年前にあった。国力が凋落傾向にあったスペインにとっては国威高揚の意味をもち、また、独立を達成したアメリカにとっては「精神的にも独立するための新しい英雄を必要としていた」（本書）。これらのことに則って400年祭が行なわれた。その前回と今回の「500周年」とが異なるのは、コロンブスの行為が結果的に「近代」を生み出すことにつながったという認識のもとに、先住民の声を基軸にして、近代主義批判の視点が生まれていることである。

「新大陸との出会いは、世界に何をもたらしたのか。…『発見』のもつ歴史的功罪を問い直す」という本書のキャッチ・フレーズを読むかぎり、本書もそうした視点に立つように思われた。だが、実際はまったく違う。構成と内容を紹介してみよう。

本書の第1章ではコロンブスの生涯が紹介される。「新大陸発見」以降については、「栄光と凋落の運命」と題した節の最後の6ページあまりがあてられている。しかし、先住民との具体的接触の模様や、新大陸でのコロンブス一行の行為については、ここでは一言も触れられていない。また、入植の開始とその失敗についても、「粘り強く効率の良い官僚機構」がなかったためと述べるのみで、具体的記述はない。ついで第2章「コロンブス時代のスペイン」と第3章「探検航海の技術」では、対外進出の背景要因である国民国家の成立と、地理学的知識や造船技術、航海技術とが紹介される。第4章は、やや歴史推理ふうに、コロンブス・ユダヤ人説の根拠となるような事柄が多々取り上げられる。そして、コロンブスの航海の背後には、活路を新天地に見出そうとしたユダヤ人たちの存在があったとの見解が披露される。

第1章からこの第4章までで本全体の9割強を占める。残り1割に満たないページ数が最終章の第5章である。本書のタイトルやキャッチ・フレーズを信じるかぎり、「歴史的

功罪を問う」あるいは「何を『発見』したのか」について問う部分であるはずだが、そのような視点では展開されていない。まず、先の4章を受けた論理の展開、収斂がない。しかもこの第5章の基調は、実のところすでに「まえがき」で予告されているように、「最近の風潮に対する筆者の小さな抵抗」、すなわち、近代主義批判に対する批判なのである。

著者は、新旧大陸の遭遇を歴史的必然とし、「現在」から「過去」を裁くことを批判する。そして、「正当」なのは「出会いによるメリット、デメリット」を見ることだという。しかし、このメリット・デメリットの基準をどこに据えるのか。現在問い直されているのはまさにその点であるのに、そのことに対する著者のコメントはない。この態度を見るかぎり、著者のいう“歴史的必然”は、単なる現状肯定にすぎないと思われる。しかも著者は、「新世界の文明のほうが進んでいる状況の下で…遭遇したとすれば、侵略者、被侵略者の関係は逆になっていないにちがいない。新世界には食人の習慣を持つ部族がいた…残虐は旧世界の専売特許ではなかった」などという。いまだ歴史的事実については論議が続く“食人の慣習”をコロンブスの航海記をもとに事実と断定し、さらには、新大陸の先住民すべての残虐性に敷衍するかのような言説には、著者自身の持つある種の偏見に無自覚であることがうかがえる。

著者は古代ヘブライ語の専門家である。宗教裁判の時期を生き延びたスペインの“隠れユダヤ人”の子孫を訪ね、その苦難の歴史を伝えるくんだり（まえがき）には、胸を打たれるものがある。コロンブスに興味をもったのも「ユダヤ人説」があつてのことという。このような著者にはむしろ、「新大陸発見」と同年に行なわれたスペインからの「ユダヤ人追放」を中心に据えての、コロンブスの行為の見直しを望みたかった。新大陸を従属的位置に置くことと、欧州社会内部の“他者”であるユダヤ人の排斥とがどのような共通ベースを持つのか、コロンブスの熱望をどう解釈できるか等々、さまざまな問いかけが可能となったことであろう。

書評 大貫良夫『黄金郷伝説—エル・ドラードの幻』、  
講談社現代新書、1992年、264ページ。

評者：熊井茂行（明治学院大学）

本書は、南アメリカ大陸という、「経済的な富ばかりでなく、学術の面でも未知の世界が広がる魅力的な土地」に「青春の夢あるいは生涯の夢を追い求めた人々の物語である」。同時に、著者は、南アメリカの探検史を一般の読者に平易に紹介することをめざしている。「エル・ドラード」という、もともと黄金に富む土地・国、すなわち「黄金郷」をさすことばに、著者は、本書でさらに「未知という領域」の意味をくわえることで、16世紀から現代にいたる南アメリカの探検者たちの群像を描いているのである。

本書の構成と、とりあげられたおもな探検者・探検（カッコ内）は、つぎのとおりである。

1. 「クントゥル・ワシの人面金冠」（著者らによるペルー北部のクントゥル・ワシ発掘）
2. 「コロンのアメリカ発見」（コロンによるカリブ海沿岸の探検航海）
3. 「インカ帝国の黄金」（ピサロによるインカ帝国の解体）
4. 「『エル・ドラード』の誕生」（ベナルカーサルらのキットとボゴタの探検）
5. 「アマゾンの国」（オレリャーナのアマゾン川探検）
6. 「黄金の都マノア」（ローリーによるオリノコ川探検）
7. 「ブラジルの血塗られた黄金」（ポルトガル人たちのブラジル探検）
8. 「地球を測ったフランス人」（ラ・コンダミーヌらのエクアドルにおける地球測量）
9. 「博物学者の黄金郷」（フンボルトの博物学研究）
10. 「科学のエル・ドラード」（ダーウィン、ウォレスらの生物学調査と進化論）
11. 「アンデス文明の遺産」（テーヨのペルーにおける考古学調査）

この構成は、うえに紹介した著者の目的にそって、周到にかんがえられている。第2章以降は、ほぼ歴史的な年代順にならべられており、南アメリカの探検史の概略がえられる。また、全体は、第2章から第7章にいたる経済的な富を象徴する本来の「黄金郷」の探検と、第8章から第11章までの未知の領域としての象徴的な「エル・ドラード」の探検の部分に、2分されている。そして、全体として、

カリブ海沿岸地域からフェゴ島まで、南アメリカ大陸の全域をおおように配慮されている。

このような本書の構成を見たとき、著者らによるアンデス形成期の考古学的発掘調査を紹介する第1章の役割が見えてくる。一面では、第1章は、先スペイン期という本書であつかわれた最古の時代への探検であり、最終章から円環状につながっている。他面、結果として黄金製品の発掘をともなったという意味で、前半部分の「黄金郷」の探検の一環でもあり、また、アンデス文明の形成という未知の領域を対象としている点で、「エル・ドラード」の探検ともなっている。そして、なによりも、本書にあらわれる探検者たちのなかでも、第1章の著者ら考古学者たちが、もともと生き生きと描かれているといえよう。

その著者の探検者としての立場は、つぎの文章にあらわれている。

「かつてはアンデス文明の遺産のうち、黄金だけが宝物とされた。しかし今日、アンデスの砂漠と山の中に埋もれているのは、黄金とは比較にならぬほどに高い価値を持つ宝である。それは機械を用いずすべてを人間の肉体と精神の力でなしとげた、古代アンデス人の文化的達成の跡としての遺跡であり、遺物であり、素手の人間の持つ大きな可能性を教えてくださいの歴史のいっさいである。

黄金にのみ価値を求める者、遺物に金銭上の価値のみを置く者は、古代アンデス人の歴史と文化遺産の破壊者以外の何者でもない」（p. 260）

著者は、周知のようにアンデス先史学を専門とする学究であると同時に、幅広い学問分野への関心と南アメリカにたいする広範な経験をもっている。また、1972年には本書の原形である「発見から征服・探査・学術調査へ」を『朝日講座 探検と冒険』第4巻（朝日新聞社）に発表し、マーシア・ウィリスの『南米の謎をさぐる』（集英社、1975年）の翻訳者でもある。そのような著者にしてはじめて、本来大部の著書を必要とする南アメリカ探検史を、豊富な原史料の引用もまじえて簡潔かつ平易に記述しえたといえよう。

なお、251ページの地図中に2カ所、256ページの本文中に1カ所、固有名詞の表記に誤植が見られた。

書評 田所清克『ブラジル — カーニバルの国の文化  
と文学』泰流社、1990年、285ページ。

評者：三田千代子（上智大学）

2年前に出版された本書はその副題にあるように、ブラジルの文化と文学に関する入門の書である。

本書の構成は、前編のブラジル社会・文化論と後編のブラジル文学論とから成っている。前編は5本の論文と1本の随筆から構成され、後編のブラジル文学の世界を理解するために社会・文化的背景の考察が試みられている。

地方的多様性と国家的統一性の同時存在をブラジル社会の特徴として捉えた Charles Wagley の1940年代のブラジル論を訳出して、ブラジル社会を把握するための視座として紹介し、次にブラジル地域研究の出発点としてブラジルの農村社会研究の動向を、60年代初頭に発表された Manuel Diégues Jr. の論文を主軸にして紹介している。

さらに、ブラジル住民を構成する重要な一要素である黒人の社会、歴史、文化的研究の動向を追い、ブラジル文化におけるアフロ・ブラジル文化の貢献を強調することで、ブラジル文化の考察を試みている。前編の最後に収録された随筆では、多民族社会ブラジルの統合のシンボルとしてカーニバルの社会・文化的機能が簡潔に紹介され、前編で展開された著者のブラジル社会文化論の具体例として紹介している。

前編は後編のブラジル文学論の背景としてブラジル社会・文化の考察がなされているために、ブラジル文学研究者としての著者の視点から選択されたブラジル社会研究のトピックスをテーマとして論じている。従って、ブラジル社会全体をバランスよく考察してはいない。しかし、それだからこそ著者自身のブラジル社会に対する固有の視座や思い入れが伝わってくるようである。

後編には総数11本に及ぶ論文が収録されており、ブラジル文学研究者としての著者のエネルギーがここに集約されている。

論文集であるために、通読すると言及されている文学作品や文学者、文学史の重複がみられ一つの著作としてある程度の整理が必要とも思われるが、ともかくブラジル文学がヨーロッパの伝統から解放されて独自の世界を確立する過程が辿られており、ブラジル文学初学の徒にとっては有益であろう。

ポルトガル文化の伝統を背負いながら植民地時代にはじまったブラジル文学は、新大陸

の自然景観の描写を通じてブラジルをこの世の楽園として描くウフェニズム、独立期の国家シンボルとして先住民インディオを捉えたインディアニズム、1920年代のブラジル社会・文化の固有性を求めようとするモデルニズムなどの中で、ポルトガルやヨーロッパの伝統と訣別して固有の世界を確立させた。

こうしたブラジル文学確立の過程はまた同時に、ブラジル国民のナショナル・アイデンティティーの形成の過程でもあると捉える著者は、ブラジル文学の研究は単なる文学研究にとどまらず、ブラジル社会を理解するためのきわめて重要な分野であることを強調している。

ブラジル文学が確立する同じ過程で、ポルトガルのポルトガル語とは異なるブラジルのポルトガル語が生まれ、それを「ブラジル語」と著者が呼称しているのは、日本におけるポルトガル語教育の概念に一つの示唆を与えるものとして興味深いものがある。

最後に収録されている Jorge Amado 論は、Amado をブラジル北東部社会を描いた典型的なブラジルの作家であり、それゆえに世界的な名声を得た作者として紹介し、ブラジル文学研究の深化を説いている。

随所にみられる参考文献解題やブラジル文学の日本語翻訳の煩瑣とも思える丁寧な紹介は、本書の構成をいささか複雑なものとしてはいるが、ブラジル文学入門の書としての役割を果たすためにはいたしかたのないことなのであろう。

技術的なことではあるが、本書で引用されている文献のポルトガル語の校正が正確になされていないことが目につき、ポルトガル語に馴染んでいない読者には混乱を招くのではないかと思われる。

著者がその「はしがき」で書いているように、本書は研究論文や随筆をまとめて掲載したものであって、体系的なブラジル文化の入門書ではない。しかし、それだけに著者のブラジルへの思い入れがそこに込められており、著者自身のブラジルに対するウフェニズムの書であるといえよう。日本におけるブラジルの文化、特に文学に関する一般的関心が依然として低いと思われる現状の中で、ブラジル文学研究者としての著者の今後の研究の展開に大いに期待したい。

書評     デイヴィッド・プライス著（斎藤正美訳）『ブル  
ドーザーが来る前に 世界銀行とナンビクワラ・  
インディオ』三一書房、1991年、291ページ。

評者：富田 与（筑波大学大学院）

「全長100マイルの道路建設からブラジルの先住民を守ろうとした人類学者の闘い」という帯に記された言辭が示すとおり、本書は学術的な研究書ではなく、「開発」の現場に立ち会った人類学者による、その実践の記録である。そして、その表現は、分析的であるというよりは記述的であり、また、客観的であるよりは主観的である。

著者は、ブラジル政府の「ポロノロエステ開発計画」に対する世界銀行による融資案件にコンサルタントとして参画した。そこでの著者の役目は、著者が1967年以来、人類学の調査あるいはFUNAI（インディオ保護局）の職員として関係してきたナンビクワラ族が、同開発計画によりいかなる影響を受け得るかを調査分析することであった。

すなわち、本書で語られている1980年6月から同年末にかけてのおよそ半年間、著者の立場は、「世界銀行」、「ブラジル政府」並びに「ナンビクワラ族」の各集団間の「仲介者」とも言えるものとなっていた。しかし、著者の基本的な態度は、あくまでも「ナンビクワラ族の幸せ」を守ることに求められ、また、それが期待された態度であると認識していたようである。

しかし、現実には、著者の思いとは別のところで計画は動かされ（少なくとも著者はそう認識している）、「ポロノロエステ開発計画」に改編を迫る内容を盛り込んだ著者の調査報告書は、著者の意図とは異なる形で同開発計画へのゴー・サインとして利用されていくことになる。米国人類学会の反対決議にもかかわらず同計画は実行され、1986年に再訪した著者の前に、ナンビクワラの故地はエスノ・サイドの傷痕をあからさまとする事となったのである。

本書は、「訳者あとがき」に引用されているレヴィ・ストロースの推薦文にも見られるように、「私たちが文化の多様性を人類共通の遺産として大切にしなければならないのはなぜか、また、どのように保護したらいいか、という理解を深めるのに役立つ本である」という間違いはない。また、著者が「エピソード再訪」の中で述べているように、「『開発』というのは、事実を見えなくしたり、歪めた

りする用語だ。耳に心地よくなじみ、不都合な現実を覆い隠している。大半の人々は、深く考えもせず『開発』という言葉を受けている」ことも恐らく間違いなく、日本の政府開発援助に関する最近の一連の議論も、そうした「開発」を巡る不用意な「寛容さ」がもたらしたひとつの問題とすることができるであろう。

しかし、ここで確認しておきたいのは、著者は「ポロノロエステ開発計画」を全面的に否定し、「開発」はされるべきではないと主張している訳では必ずしもない点である。著者の論点は、(1)FUNAIに代表されるブラジル政府の在り方は「ナンビクワラ族の幸せ」をもたらす得るものではなく、(2)保健および教育等に関する改善を加えるべきではあるが、同開発計画の実施そのものはやむなき、とする2点に集約することができる。

本書で展開される「開発」を巡る議論の大部分は、これまでも多くの人類学者によって主張されてきたものを追認しているに過ぎない点は否めない。しかし、人類学者を具体的に巻き込んだ形での「開発」のプロセスが文字化され、翻訳されたことで、「開発」を巡る人類学の議論の中で見逃されがちであった幾つかの点が問題として喚起されたことも確かである。中でも、「報告書」に関する下りの中で、著者の思惑とは異なる形で人類学的言辭が利用されている点は注目すべきであろう。すなわち、これまでに蓄積された人類学的言辭は、すでに、様々な形で言辭の発信者の意図とは異なる方向で「開発」に利用されている可能性がある。この意味で、本書で語られたプロセスの前と後が気に掛かる。

人類学者が直接関与しない時点で、人類学的言辭が「開発」施行者によりいかに解釈されているか、また、事後においても、正当化のためにいかに利用されてきたかは、今後、研究の対象とされるべきテーマの一つとすることができるであろう。

Price, David, *Before the Bulldozer*  
—The Nambiquara Indian and the  
World Bank: Washington D. C., Seven  
Locks Press, 1989.

#### 4. 会員活動情報 (つづき)

##### ○ポルトガル・ブラジル学会総会

ポルトガル・ブラジル学会 (A J E L B) の92年度総会が、10月17日京都外国語大学で開かれた。京都外国語大学の住田育法氏による「カヌードスの乱の歴史的意義について」、同弥永史郎氏による「ポルトガルの正書法」、東京外国語大学の金七紀男氏による「近世ポルトガルにおける新キリスト教徒の経済活動」、同池上岑夫氏による「再びS E付き自動詞について」の発表があった。参加者は約40人。

なお学会の日本語名を「日本ポルトガル・ブラジル学会」と改めた。(堀坂)

#### 6. 学術・文化情報

##### ○サンパウロで日本関係の国際会議

ブラジル・サンパウロに本拠をおく「日本および太平洋地域研究に関するブラジル学会」(Sociedade Brasileira de Estudos sobre Japão e Pacífico)では、1993年11月に第3回大会を開催する。11月7日開催された本学会理事会で共催することとなり、会員の参加が期待されている。同大会に関する情報は、Prof. Gilson Schwartz, Rua Dr. Homem de Mello, 697-apt. 5152, CEP 05007, São Paulo, Brazil.

##### ○米フロリダ大学のフェローシップ

米フロリダ大学のCenter for Latin American Studiesでは、ラテンアメリカ研究者に対して半年間(one semester)のフェローシップ・プログラムをもっている。ラテンアメリカに関する研究であれば、分野を問わないとのこと。連絡先は、Prof. Murdo MacLeod, Bacardi Scholar Advisory Committee, Center for Latin American Studies, University of Florida, Gainesville, FL 32611. Tel. 904-392-0375, Fax. 904-392-7682.

##### ○ベネズエラで文化・社会変動に関する国際会議

University of South Floridaと

Universidad de los Andesは、1993年3月10-14日の予定でベネズエラのメリダ市にて、Culture, Society and Change in the Americas と題する国際会議を行う。連絡先は、Leslie Oja, Division of Conference and Institutes, University of South Florida, 4202 E. Fowler Ave., EXS 018, Tampa, FL 33620-8700. Tel. 813-974-2403, Fax. 813-974-5421.

##### ○マドリッドのMuseu de América 図書館開館

スペインのマドリッドにあるMuseu de América より、さる10月20日から図書館が公開され、研究者、学生が使えるようになったとの連絡があった。所蔵されているのは歴史、美術、考古学の資料が中心で、月曜日から金曜日まで午前9時-午後2時半開館。

##### ○ガブリエル・セッケリー氏来日

カルフォルニア大学サンディエゴ校米墨研究所上級研究員で、L A S A の対日交流委員会のメンバーでもあるセッケリー氏が、日本学術振興会の招きで来日した。氏は10月29日から11月15日まで日本に滞在し、N A F T A の日本への影響について、政府機関・企業での聞き取り調査に従事する一方、東京大学と筑波大学において上記テーマで講演、上智大学でもアンドラーデ理事、堀坂理事、今井会員等と意見交換をおこなった。

〔編集委員より〕

海外との交流情報を積極的にお寄せ下さい。

#### 7. 近着会員業績

〔抜〕横山和加子「スペイン人の入植と都市の形成(1521~1550年代) —メキシコ3都市の事例から—」(『社会文化史学』第29号、1992年5月)



〔抜〕石井陽一「イスパニダーの歴史的変遷」  
（『インディアスの迷宮——1942～1992——』  
神奈川大学人文学研究所編、1992年9月）

〔抜〕青木康征「コロンブスの弁明」（同上）

〔抜〕加藤薫「逸脱のラテンアメリカ美術」  
（同上）

〔抜〕藤田富雄「ブラジルにおけるカルデシ  
ズムの一考察」（同上）

〔抜〕柳沼孝一郎「大平洋への道——日西交  
渉史のあけぼの——」（同上）

〔抜〕内多允「自動車産業の米国・メキシコ  
の関係」（『湘北紀要』第13号、湘北短期大  
学、1992年）

〔抜〕角川雅樹「対人恐怖と植民地心理——  
森田療法とラテンアメリカにおける『あきら  
めの哲学』について——」（日本精神衛生学  
会『こころの健康』第7巻第1号、1992年7  
月）

〔抜〕同上「メキシコにおける喫煙、ア  
ルコール、薬物の問題——精神保健の動向と  
して——」（『精神医学』第34巻第3号、医  
学書院、1992年3月）

〔抜〕同上「スリナム」（東海大学留学  
生教育センター『人間の場から』第27号、  
1992年6月）

〔抜〕同上「ガイアナ」（東海大学留学  
生教育センター『人間の場から』第28号、  
1992年9月）

〔冊〕青木芳夫訳「特集：メキシコ革命の新  
地平」（ラテンアメリカ資料センター『資料  
ラテンアメリカ』第20号、1992年7月）

〔冊〕同上「3人のミスキート人（ニカ  
ラグアの民話1）」（ラテンアメリカ資料セ  
ンター『資料ラテンアメリカ特集シリーズ  
9』、1992年8月）

〔籍〕中川文雄・田島久歳・河口和也他『日  
系人本邦就労実態調査報告書』（国際協力事  
業団、1992年）

〔籍〕前田正裕『コロンブスの野心と挫折—  
—カリブ海で何が起こったか？—』（世界  
の動き社、1992年10月）

〔冊〕グスタボ・アンドラーデ編『イペロア  
メリカの誕生と形成』（上智大学イペロアメ  
リカ研究所『ラテンアメリカ・モノグラフシ  
リーズ』第7号、1992年9月）

〔抜〕横山和子<sup>か</sup>「フアン・インファンテと  
その一族——16世紀ヌエバ・エスパーニャの  
入植者とクリオーリョ社会の形成——」（『西  
洋史学』第166号、1992年9月）

## 8. 事務局から

### 1) 寄贈図書

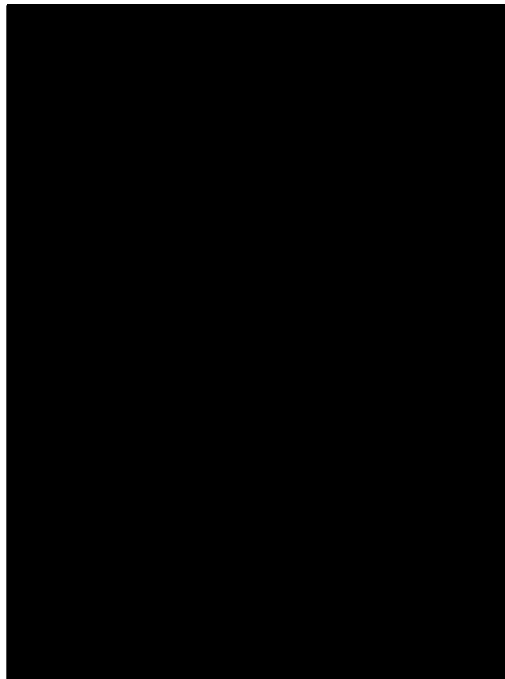
〔籍〕エルミロ・アブレウ・ゴメス著『カネ  
ック——あるマヤの男の物語——』（金沢か  
ずみ訳、行路社、1992年7月）

〔冊〕『拉丁美洲研究』（中国社会科学院拉  
丁美洲研究所、1992年2月）

〔冊〕『ラテンアメリカ・レポート』第9巻  
3号（アジア経済研究所、1992年9月）

〔冊〕『イペロアメリカ研究』第14巻1号  
（上智大学イペロアメリカ研究所、1992年9  
月）

### 2) 新入会員（第58回理事会承認）



問題の専門家でもアンデス地域の麻薬問題に関心を持つ人でもいいそうです。興味のある方は、以下の住所にご連絡下さい。

Hugo Cabieses, Fundación Andina,  
Tizón y Bueno 847, Jesús María,  
Lima 11, Perú  
Tel. 51-14-713237 Fax. 51-14-719093

#### 5) 至急会費納入を

1992年度までの会費未納な方は至急納入して下さい。一般会員年7,000円、学生会員5,000円、準会員25ドル。

郵便振替口座 宇都宮8-10994

#### 編集後記

10月にコロンブス500周年を迎えたが、ラテンアメリカではいろいろな面で変容の兆しが見える年でもある。北米自由貿易協定が合意に達し、新たな米州統合の試みが本格的に始まった。面白かったのは、日本が金丸スキャンダルで揺れている時にブラジル大統領の弾劾が起り、日本の政治がラテンアメリカから非難される仕儀となったこと。経済大国日本の民主制度も自慢できるものではない。

いずれにせよ世界中が変化の波に洗われ、価値観が定まらず不安定さが目立つ時代にあって、いかに腰を据えて研究を行うか、考えさせられる今日このごろである。(山岡)

会報に関するご意見や情報、記事は下記の各編集委員へお寄せください。

堀坂浩太郎(理事)、飯島みどり、  
山岡加奈子、千葉 泉

#### 4) 麻薬問題研究者は連絡を

ペルーの経済学者で現在ペルーの麻薬問題を研究しているウーゴ・カビエセスさんが、麻薬問題に関心を持つ日本の研究者または実務家との交流を希望しています。日本の麻薬

No.43 1992年11月25日発行

〒305 茨城県つくば市天万台1-1

筑波大学歴史人間学系山田睦男研究室内

日本ラテンアメリカ学会事務局

☎・Fax 0298-53-4034

郵便振替口座 宇都宮8-10994